２０２１年度

近畿ＥＳＤコンソーシアム成果発表会・実践交流会

２０２１年１２月２５日・２６日

近畿ＥＳＤコンソーシアム・奈良教育大学

はじめに

2021 年はどのような年だったでしょうか？きっと後世の歴史家は「新型コロナウイルスによるパンデミックの年」と書くでしょう。2021 年 12 月 3 日現在で、世界の新型コロナウイルスの累計感染者数は 2 億 6408 万人、死者は 523 万人に達しています。日本では、夏のデルタ株による感染拡大がようやく落ち着きを見せたことで、経済活動も再開にむけて進み出しました。近畿ＥＳＤコンソーシアムの成果発表会・実践交流会も対面式で開催することとしました。しかし、新たにオミクロン株という感染力の強い変異株による感染者数が増えつつあり、まだまだ油断はできません。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、この１～2 年の間に学校などでのＩＣＴ環境はずいぶん改善されました。子ども一人に１台のタブレットが配布され、オンラインを活用した授業も普通になりました。オンラインを利用することで学校間交流も簡単にできるようになりました。翻訳機能をもつＡＩが安価に普及すると、海外の人々ともオンラインでつながることもできそうです。しかし学校では、人との間隔をあける必要があることから、対話型の授業を行うのは難しくなったのではないでしょうか。学習者相互の意見交流は学習者の視野を広げたり、思考力を高めたりする場面なのですが、対話型授業ができず、説明納得型の授業が主流になったときの学習者の学力低下が心配です。地域の産業や土地利用の様子を見学に行ったり、地域の方々にインタビューしたりして教えてもらう機会も減りました。

ＥＳＤは学習者の価値観と行動の変革を促し、ＳＤＧｓの達成に能動的に参加・協力しようという態度を育てる教育です。価値観や行動を変革するためには、例えば認知的葛藤を経験することが有効ですが、対話によって葛藤する場面を持ちにくいのが現状です。また、人と出会い、その人の生き方にあこがれることで行動変容が促されることもありますが、人との出会いも自粛です。

新型コロナウイルスの感染拡大により、ＥＳＤの授業実践が難しくなっています。そのような中でも、持続可能な社会の創り手を育てることの責任をしっかりと受け止め、取り組んでおられる実践家の方々が本日の会合に参加し、実践発表してくださいます。互いの実践からしっかり学び合い、コロナ禍であるものの、参加して良かったという会合にしたいと思います。

2021 年 12 月 25 日

奈良教育大学　学長
近畿ＥＳＤコンソーシアム　会長　加藤　久雄

２０２１年度　近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

１．目的

小学校においては 2020 年度、中学校では 2021 年度から新学習指導要領が実施された。新たな学習指導要領には前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の小中学校で ESD の理念に基づく教育活動が展開されると考えられる。また、持続可能な開発目標（SDGｓ）への関心が企業や NPO などの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、また ESD の普及を目的に開催する。

２．主催

近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学

３．後援　ASPUnivNet、ESD 活動支援センター、近畿地方 ESD 活動支援センター

４．開催日時

2021 年 12 月 25 日（土）9：50 － 17：20
12 月 26 日（日）9：00 － 13：00

５．会場（対面式）

2021 年 12 月 25 日（土）：奈良教育大学管理棟 2 階大会議室等
12 月 26 日（日）：奈良教育大学次世代教員養成センター２号館

６．日程

☆１日目

【12 月 25 日（土）】

9：30 － 9：50　受付（奈良教育大学管理棟 2 階）

9：50 － 10：00　●開会行事
全体司会：阪本 さゆり（奈良教育大学）
挨　拶：加藤 久雄（奈良教育大学長）
挨　拶：河村 裕美 氏（文部科学省国際統括官付国際戦略企画官）

10：00 － 12：00　●ESD 子どもフォーラム：管理棟 2 階大会議室（発表 20 分＋講評）
（参加校）
奈良市立朱雀小学校
長浜市立高時小学校（ビデオ発表）
橋本市立あやの台小学校
奈良教育大学附属中学校
司　会：西條秀哉(本学学生)、中家麻弥(本学学生)、大矢真央(本学学生)
講　評：河村 裕美 氏（文部科学省国際統括官付国際戦略企画官）
柴尾 智子 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）
加藤 久雄（奈良教育大学長）

※参加者数が多い場合は、別室にてオンラインで見学していただきます。ご了承ください。

12：00 － 13：30　　昼食休憩

13：30 － 15：30　　●ESD 実践交流会Ⅰ（発表 20 分＋質疑 10 分）

○第１分科会：管理棟２階大会議室

（参加者）

榊　洋史 氏（橋本市立高野口小学校）

安座間 康 氏（沖縄県立北部農林高等学校）

福山 浩之 氏（奈良新しい学び旅推進協議会）

片浦 亮 氏（大和郡山市立郡山西中学校）

司　会：大西　浩明（奈良教育大学）

○第２分科会：管理棟２階第１会議室

（参加者）

藏前 拓也 氏（広陵町立真美ヶ丘第一小学校）

平田 絵美 氏（大牟田市立大牟田中央小学校）

吉田 知尋 氏（奈良ストップ温暖化の会）

川﨑 貴寛 氏（橿原市立耳成南小学校）

司　会：岡村 孝之 氏（橋本市教育委員会）

○第３分科会：次世代教員養成センター1 号館大会議室兼教室

（参加者）

吉村 泰典 氏（奈良市立六条小学校）

鬼塚 正博 氏（福岡市立玄界小学校）

南　哲朗 氏（奈良町資料館）

小関 直幸 氏（寒河江市立醍醐小学校）

司　会：大森 亮 氏（彦根市教育委員会）

15：45 － 17：00　　●ESD 講演会：管理棟２階大会議室

題　目：「ESD カリキュラムマネジメントはこうする」

講　師：及川 幸彦 氏

（東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター主幹研究員）

※参加者数が多い場合は、別室にてオンラインで見学していただきます。ご了承ください。

17：00 － 17：20　　●閉会行事：管理棟２階大会議室

講　評：長友 恒人 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

柴尾 智子 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

挨　拶：高橋 豪仁（奈良教育大学副学長（国際交流・地域連携））

☆２日目

【12 月 26 日（日）】会場：奈良教育大学 次世代教員養成センター２号館

8：40 － 9：00　受付（次世代センター２号館）

9：00 － 10：30　●ESD 実践者対談シンポジウム：次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

（参加者）

・長野会場　：菅原　勇介 氏（山ノ内町立南小学校）

・沖縄会場　：神村　智子 氏（沖縄県教育委員会）

・山形会場　：太田　　馨　氏（上山市立南小学校）

・大牟田会場：高倉　洋美 氏（大牟田市教育委員会）

・福岡会場　：遠入　哲司 氏（福岡市立田隈小学校）

・奈良会場　：西口美佐子 氏（奈良市立東登美ヶ丘小学校）

司　会：大西 浩明（奈良教育大学）

助言者：長友 恒人 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

10：40 － 12：40　●ESD 実践交流会Ⅱ（発表 20 分＋質疑 10 分）

○第４分科会：次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

菅原　勇介 氏（山ノ内町立南小学校）

長浜佐知子 氏（奈良市立都跡小学校）

大島　英樹 氏（福岡市立住吉小学校）

鎌田　大雅　　（奈良教育大学附属幼稚園）

司　会：三木 恵介 氏（奈良市教育委員会指導主事）

○第５分科会：次世代教員養成センター2 号館会議室

中島 寛子 氏（大牟田市立天の原小学校）

中澤 哲也 氏（平群町立平群北小学校）

若森 達哉　　（奈良教育大学附属中学校）

阿部 友幸 氏（山形大学附属特別支援学校）

司　会：河本 大地（奈良教育大学）

○第６分科会：次世代教員養成センター2 号館モデル教室

島　俊彦 氏（大牟田市立吉野小学校）

中村 友弥 氏（奈良市立朱雀小学校）

新垣 孝子 氏（糸満市立糸満中学校）

佐藤　こころ さん（奈良教育大学ユネスコクラブ）

根本　優 さん　（奈良教育大学ユネスコクラブ）

司　会：中澤 静男（奈良教育大学）

12：40 － 13:00　●閉会行事：次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

講　評：柴尾 智子 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

及川 幸彦 氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

挨　拶：松田 孝史（奈良教育大学附属中学校 校長）

【ESD子どもフォーラム】12 月 25 日(月)10：00―12：00：大会議室

【奈良市立朱雀小学校】

～・～

【長浜市立高時小学校】(ビデオ発表)

【ESD子どもフォーラム】12 月 25 日(月)10：00―12：00：大会議室

【橋本市立あやの台小学校】

～・～

【奈良教育大学附属中学校：ユネスコクラブ】

未来を創る子どもの育成
―ユネスコスクールとしての責務―

榊　洋史（橋本市立高野口小学校）

Ⅰ　学校紹介

高野口小学校のある橋本市高野口町は、平安時代以降霊峰高野山への玄関口、門前町として栄え、近代に入り繊維産業のまちとして発展、パイル織物の町として全国的に知られるようになりました。しかし、地場産業の衰退、少子高齢化により児童数が年々減少し、今年度児童数２２５名の学校です。

現校舎は昭和１２年に建てられ１０年前に改修工事を行い、今も小学校として現存する８４年の歴史ある木造平屋建て校舎です。

平成２６年（２０１４）国の重要文化財に指定
平成２７年（２０１５）ユネスコスクール加盟

Ⅱ　ユネスコスクール加盟校として

（１）ユネスコスクールの校長に着任
・ユネスコスクールはＥＳＤの推進拠点
・サーバントリーダーシップの徹底
・ホールスクールアプローチの展開
教職員、保護者、地域へのＥＳＤ・ＳＤＧｓの発信
学校教育目標、研究組織の刷新

学校教育目標　「未来を創る子どもの育成」
最上位目標　「自分で考え行動する子（主体性）」
研究組織　「授業研究部会・ＥＳＤ部会」

（２）ＥＳＤ・ＳＤＧｓの実際の取組
・「ふるさと学習」に全学年ＥＳＤの視点で取り組む中で、校区である高野口の自然や歴史、文化遺産などを知ることや地域の方との交流を通して、郷土愛を育て、子どもたち自身が地域の一員であることを自覚し、積極的に地域に関わろうとする態度を育成し、価値観や行動の変容につなげる。
・児童会をＳＤＧｓ推進委員に任命し、学校・地域にＳＤＧｓを広める児童の主体的な活動を促す。（ＳＤＧｓについてのアンケート調査、校内放送によるＳＤＧｓの啓発、給食残量調査、エコキャップ回収活動等）

Ⅲ　まとめ

・社会の変化を見据えた、新たな学びへの進化が求められる今、本校では「未来を創る子どもの育成」を学校教育目標にユネスコスクールとしての学校づくりを進めています。持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力の一つとして対話力の育成を国語科の授業研究で進め、同時に学校全体でＥＳＤ「ふるさと学習」を中心に取り組んでいます。国語科の研究とＥＳＤの研究を両輪とし、教師が同じベクトルのもと学校教育目標「未来を創る子どもの育成」の達成に向かうことがユネスコスクールとしての本校の責務だと考えます。

科目「食品製造」における、ＥＳＤの視点を取り入れた授業づくりの工夫
―地域の課題に着目した学習活動―

安座間　康（沖縄県立北部農林高等学校）

Ⅰ　はじめに

本実践は、教科「農業」科目「食品製造」においてプロジェクト学習を通して、地域農業の課題に着目し、地域や社会の健全で持続的な発展を担うために必要な資質・能力育成することを目的に、実践を展開した。

Ⅱ　授業実践

沖縄県北部農林高等学校の食品科学科２年次37名を対象に、今年度４月から11月にかけて「地域農業の現状と課題」を教材として取り上げて実践した。

【単元の目標】

食品製造が人々の生命の維持や豊かな食生活を提供するという社会的な役割を担っていることを理解し、生産性と品質の向上を図るとともに、地域農業発展の視点から地域農産物を使った商品開発やブランド化、６次産業化など、その振興や社会貢献に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。

主な学習活動	学習への支援・資料
1. つくる責任についての事例を学ぶ。	・HACCP、GAP、ブランド化、6次産業化について考えを深めさせる。
2. つかう責任についての事例を学ぶ。	・食品ロス問題、エシカル消費について考えを深めさせる。
3. 食糧自給率のグラフ、環境問題の資料をもとに、今後の学習の見通しをつかむ。 また地域農業の現状や課題について学ぶ。	・食糧自給率のグラフ、環境問題の資料を提示し、食品業界が抱える食の安全性・環境汚染・原料の供給などの課題解決に向けて、何ができるのか考えさせるようにする。
4. 地域農産物、6次産業化について調べることで、地域の実情を理解させる。	・商品を提示し、地域農産物について興味を持たせるようにする。
5. 地域素材を使用した食品製造実習を行い、原材料費と味の違いを学習する。	・パン及びジャム製造を実施し、味と原材料費を考慮しながら、商品開発の方向性を明確化させる。
6. 地域振興に貢献するためのアイデアをポスターにまとめる。	・ポスター作成に向け、各項目の記入例を提示し、考えをまとめさせる。

Ⅲ　成果と課題

【成果】

・つかう責任についての意識が高まり、地域社会の持続的な発展につながる発言がみられた

【課題】

・探求的な学びの広がりと深まり。

奈良の歴史文化遺産から持続可能な社会づくりを学ぶ
―行動の変容を促す・奈良SDGｓ学び旅―

福山　浩之（奈良新しい学び旅推進協議会・事務局）

Ⅰ　奈良新しい学び旅推進協議会の発足

本協議会は、2020年11月に奈良教育大学を中核として奈良商工会議所・奈良県旅館組合等の観光事業者をつないで発足した、産学官民連携のコンソーシアムである。「まちごと世界遺産」という奈良の強みを活かした歴史文化遺産からＳＤＧｓを学ぶプログラム：「奈良ＳＤＧｓ学び旅」を開発し、「安心・安全なまちづくり」・「地域経済の活性化」・「持続可能な社会づくりの担い手育成」への貢献を目指している。

Ⅱ　実際の取り組み

【昨年度】

〇郡山西中学校無料モニターツアー　校外学習（県内）
・2021年1月22日　1年生　中澤先生の講義+FW
・2021年2月04日　2年生　中澤先生の講義+FW
〇ガイド研修
・2020年12月～2021年2月　座学研修+2回のFW+まとめのふりかえり　計4回

【今年度】

〇教育旅行向け無料モニターツアー　校外学習（県内外）
・2021年9月～2022年1月　計796名　奈良県、大阪府、神奈川県の中学校・高校で実施
〇大人向け（企業研修含む）無料モニターツアー
・2021年10月27日　11名（一般参加・宿泊施設・旅行会社）
・2021年11月06日　15名（一般参加・旅行会社・NPO）
・2021年11月17日　18名（一般参加・宿泊施設・旅行会社）
〇ガイド研修
・2021年7月～2022年1月　2回の座学研修+3回のFW+まとめのふりかえり　計6回

観光庁の補助金を活用し奈良県内外の中学校・高校を対象に、校外学習としての利用を想定した無料モニターツアーを実施した。参加者は、奈良教育大学で「奈良で学ぶＳＤＧｓ」について中澤先生、大西先生、河本先生、杉山先生の講義を受けた後、協議会主催のSDGs研修を受けたボランティアガイドの案内で東大寺コース・ならまちコース・春日山原始林コースの3コースに分かれFWを行った。

Ⅲ　アンケート分析結果（5段階評価）

SDGｓについての理解が学び旅を体験したことで深まったと感じた人は、全体の81％に達した。また、「主体的・対話的で深い学び」を重視したフィールドワークの評価も高く、SDGｓに対する気づきや奈良について知らなかった事を知れた・体験できたことに喜びを感じた人も多かった。

課題として、自身の町に帰ってからの行動の変容に繋がる要素が不足していると感じた。実際に、講義テーマやツアー内容以外のテーマに興味は湧いたという人は、全体で32％に留まっている。「奈良で学び・気づいた事で自身のまちを見つめ直し、実際の行動に移す」ためには、どのようなアプローチが必要か、奈良教育大学の指導、協働を通じて引き続きプログラム改善を行っていく。

Ⅳ　新たな取り組み「奈良公園SDGs自然学校」等のご紹介

「消費」は「幸せ」か？
―南アメリカ州における森林伐採から―

片浦　亮（大和郡山市立郡山西中学校）

Ⅰ　はじめに

人々の日々の生活に欠かせないものが「消費」である。我々は日々何かを「消費」して生活をしている。本校の生徒たちもその例外ではない。

本校の生徒に学習することの目的を問えば、「将来のため」と答えるが、それは「この世界の将来のため」ではなく「自分の楽しい将来のため」である。「自分の楽しい将来」とは何かを問えば、自分にとって価値のある「もの」を手に入れたり、より多くのものを「消費」したりすることと答える生徒がほとんどである。

本校の多くの生徒は「消費」こそが「幸せ」であるという価値観を持っている。

今回は、学習指導要領地理的分野「内容」（１）の「世界の様々な地域」ウ「世界の諸地域」⑤「南アメリカ州」を取り上げ、ＥＳＤの視点を盛り込んだ教材開発を行う。地球の裏側で、私たちの消費を支える国々の存在とそこで発生している環境問題を知ることで、既存の価値観を揺さぶり、新たな価値観の創造へとつなげたい。

Ⅱ　授業実践について

各時間の概要と主な問いについて以下にまとめる。

	概要	主な問い
第１時	森林の減少が地球環境や人間を含む生物に与える影響を知る。	なぜ、森林が減少することが環境問題といわれるのだろうか。
第２時	世界各地で森林が減少している原因を知る。	なぜ、森林は減少しているのだろうか。
第３時	南アメリカ州の森林伐採に関係のある身近な製品を知り、森林の減少を自分事としてとらえる。	自分たちの生活と、南アメリカ州の森林が減少していることに関係はあるのだろうか。
第４時	人々の消費とブラジルの森林減少の関係について考える。	なぜ、ブラジルでは大豆の生産が増え、大豆畑の面積が広がっているのだろうか。
第５時	「世界一貧しい大統領」の演説から、再度「幸せ」について考える。	大統領が言う「幸せ」とは何だろう。

まみいちから伝える竹取物語の魅力
― 万葉集　古典に親しもう ―

藏前　拓也（奈良県広陵町立真美ケ丘第一小学校）

Ⅰ　はじめに

『竹取物語』の冒頭は「今は昔、竹取の翁といふものありけり。」という一文から始まる。ここに登場する竹取の翁は、主人公であるかぐや姫の育ての親であり、名を「讃岐造」(さぬきのみやつこ)という。讃岐造が校区の地域にある「讃岐神社」の近くに住んでいたといわれることから、児童たちが住んでいる広陵町は『竹取物語』発祥の地とされている。

単元の中では、地域のボランティアガイドと万葉文化館の研究員にゲストティーチャーとして協力を依頼した。児童らが自分たちだけでは知り得ない情報やお話を聞き、より深く『竹取物語』の魅力や価値について考えさせた。そして、地域の住民として、知っているつもりだったけれど、知らないことがあったことを学習課題に設定した。地域の遺産といえる『竹取物語』を広めるために、主体的に行動できることを目標に行った実践の一端を報告する。

Ⅱ　実践の概要

■第６学年　総合的な学習の時間(全１５時間)

(１)古典に親しもう。(知る)

「作者不明の物語が、千年以上も受け継がれているのはなぜだろう。」

(２)讃岐神社と竹取公園に行ってみよう。(調べる)

「竹取物語と万葉集はどのような関わりがあるのだろう。」

(３)ゲストティーチャーからお話を聞く。

・広陵町ボランティアガイド：粟村眞吾氏

・奈良県立万葉文化館研究員：阪口由佳氏

(４)調べたことをまとめ、プロジェクトを発足する。(まとめる)

「竹取物語の魅力を伝えるために、自分たちにできることって何だろう。」

(５)まみいちかぐや姫プロジェクト発信。(ひろげる)

・グッズ開発、靴下や和菓子のデザイン

・PR動画の作成　等

Ⅲ　考察

地域にまつわる題材を教材に取り上げたことで、自分たちが住んでいる広陵町の魅力あるものを再発見できた。また、ゲストティーチャーや地元企業の方々と出会い、専門的なお話を聞くことで『竹取物語』の魅力や価値を考える機会になった。

学習を通して、SDGsの目標１１と１７への貢献につなげることができたのではないかと考える。

図１　竹取公園へ見学

見つけよう　広げよう　わたしたちのまちの宝
―大牟田市動物園との関わりを通して―

平田　絵美（大牟田市立大牟田中央小学校）

Ⅰ　はじめに

（１）大牟田市が取り組む持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）について

市内の全ての公立小･中･特別支援学校がユネスコスクールに加盟して，大牟田市の特徴を踏まえたＥＳＤの実践が各学校で展開している。

（２）本校が取り組む持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）について

「持続可能な社会づくりに向けての課題を見出し，それらを解決するために必要な資質・能力を身に付けた子供」を育てるために，校区内の「大牟田市動物園」との関わりを総合的な学習の時間を中心に設定し，各学年で身に付けるべき資質・能力のつながりを考慮した学習を展開している。

Ⅱ　５年生の実践「見つけよう　広げよう　わたしたちのまちの宝」

（１）単元の目標とＥＳＤとの関連について

総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力を基に単元の目標を設定し,「相互性」「連携性」「責任性」を働かせながら,「クリティカルシンキング」「システムズシンキング」「コミュニケーション力」を育成するための学習を展開している。

（２）単元計画（全１４時間）と活動の実際について

○課題の設定（２時間）

・大牟田市役所の観光おもてなし課のＧＴとの関わり，動物園の歴史や魅力を基にして動物園への思いや願いをもつ活動。

○情報収集（３時間）

・動物園の園長や飼育員の方々，動物，施設と繰り返し関わり，動物園のヒト・モノ・コトについての理解を広げたり深めたりする活動。

○整理・分析（１時間）

・ＫＪ法を用いて，各動物担当の飼育員の方々に共通する取組について交流し,「心と体に寄り添う飼育」について理解する活動。

○まとめ・表現（７時間）

・これまでの総合的な学習の時間の発信方法を振り返り，動物園の魅力をまとめたり,発信の内容や方法について考えて表現したりする活動。

○振り返り（１時間）

・単元全体を振り返って自他の学びや成長について交流し，今後の自己の生き方について考える活動。

（３）成果と課題について

成果：動物園との関わりを自分事と捉える姿　課題：体験活動の選定

（４）来年度の取組に向けて

自己の生き方を考えることにつながる意図的・計画的な体験活動の設定

第２分科会③

だれもが楽しくエコを学べる場づくり

ー日常生活のなかで、小さくても楽しくECOな発見をー

吉田　知尋（奈良ストップ温暖化の会）

Ⅰ　奈良ストップ温暖化の会の活動

NPO法人奈良ストップ温暖化の会は2020年に設立20周年を迎えました。奈良県地球温暖化防止活動推進センターとして県知事より指定を受け、環境啓発のイベントやパネル展示、市民向け講座などを通して県内におけるカーボンニュートラルで持続可能な社会実現に向け日々発信し、活動しています。

Ⅱ　奈良市と連携した事業「だれもが楽しくエコを学べる場づくり」

2013年度より奈良市が奈良市立全小学校3学年で実施する環境出前授業「エコキッズ！ならのこども」の講師として参画、2016年度からはエコアイデアコンテスト「おしえてECOキッズ！」＆エコイベント「あつまれECOキッズ！」（奈良市環境政策課主催、奈良ストップ温暖化の会企画運営）を毎年開催してきています。小学生独自の視点でエコな発明や発見を考える「おしえてECOキッズ！」に取り組んで頂き、その表彰式と同時開催のエコイベント「あつまれECOキッズ！」において応募してくれた小学生、来場者の方々、参加団体含め、みなさんと環境について楽しみながら考える一日としています。

図１　おしえてECOキッズ！募集チラシの表紙

写真１　今年制作した動画内の映像

Ⅲ　奈良教育大学ユネスコクラブの参画・協力による動画教材の制作

本年もコロナ禍で対面での啓発が難しいことも考慮し、ユネスコクラブの協力を得て『自宅で学べる動画教材』を制作しました。【マイボトルVSペットボトル】、【電気の使い方】、【食品ロス】、と3つの班に分かれて企画から撮影、編集に至るまでそれぞれのアイデアや企画力を活かして制作してもらいました。

https://naso.jp/naso-coolchoice/ecokids/educational-material.html

耳成南小学校　２年生　生活科
―耳成南小学校　生き物マップをつくろう―

川﨑　貴寛（橿原市立耳成南小学校）

Ⅰ　はじめに

本取組では、２年生の生活科において自分たちが生活する学校の中にどのような生き物がいるのか調べ、生き物の様子について観察し、学年の児童全員で生き物マップを作る実践である。橿原市立昆虫館（橿原市）と森と水の源流館（川上村）の職員の方とリモート授業を実施し、自分たちがグループで調べた生き物の特徴を発表し、疑問に感じたことを質問し教えてもらう時間も取り入れた。３年生で学習する理科の学習につなげられるように学習を進めたうえでの成果と課題について発表する。

Ⅱ　ＥＳＤとの関連性

①学習を通して主に養いたいＥＳＤの視点

●多様性：自分たちの身近にはどのような生き物がいるのか興味をもち生き物を採集したり観察したりすることによって、生き物の多様性を知る。

②学習を通して主に養いたいＥＳＤの資質・能力

●多面的総合的に考える力：生き物を採取し観察することで自分たちの身近で生活する生き物の特徴について気付く。

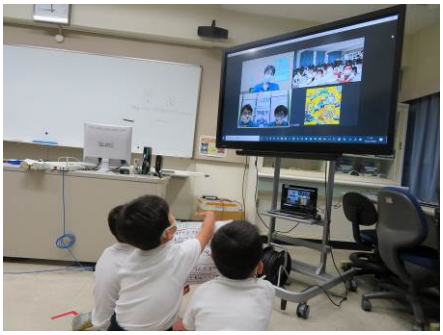
●進んで参加する態度：グループで生き物の特徴について調べ、発表する。学習のまとめとして学年全員で作った生き物マップを廊下に掲示する。

③学習で変容を促すＥＳＤの価値観

●自然環境や生態系保存の活動

④関連するＳＤＧｓの目標

●15.陸の豊かさも守ろう



Ⅲ　実践の概要

① 生き物クイズ（１時間）

② 生き物採集、観察（２時間）

（採集した生き物を飼育し観察する）

③ グループによる調べ学習（２時間）

④ リモート授業（１時間）

⑤ 分布図を作成する

第３分科会①

地震からくらしを守る
―大地震から六条校区を救え！六条の奇跡プロジェクト―

吉村　泰典（奈良市立六条小学校）

Ⅰ　はじめに

現代社会には多くの問題が山積している。とりわけ自然災害の多い日本では、防災意識を高めることは持続可能な社会の実現のために重要な課題であるといえる。本実践は、４年生の社会科の防災単元で、地震災害を取り上げた実践である。地震災害について３人のゲストティーチャーから学び、ねり合うことを通して、子どもたちが防災を自らの問題として捉え、その解決に向けて主体的に関わろうとする態度をもつことを目指した実践である。学習を通して、子どもたちは自分たちにできることを「六条の奇跡プロジェクト」と名付け、六条校区を地震から救うための行動を考えた。

Ⅱ　単元の流れ

	学習活動
みつめる	◆過去の地震の資料を見る① ◆阪神大震災で被災された方の話を聞く②（GT） ◆過去に県内に被害をもたらした地震について調べる③ **学習問題　大地震から自分たちの命を守ることはできるだろうか。**
しらべる	◆南海トラフ、直下型地震について調べる④ ◆市役所や県庁の備えについて調べる⑤（GT：県庁防災統括室の方） ◆地域の備えについて調べる⑥（GT：自主防災の方） ◆家庭の備えについて調べる⑦ ◆学習問題についてまとめる⑧
ふかめる	◆自分たちのくらしは地震から守られているのか話し合う⑨ **ねり合い　大地震から自分たちの命を守ることはできるだろうか。**
ひろげる	◆自分たちにできることについて話し合う⑩ ◆六条校区を大地震から救え！⑪ （チラシ作成⇒地域に回覧＆家庭への啓発）

Ⅲ　成果と課題

本実践を通して、子どもたちは、地震災害が自分たちの命を脅かす脅威であること、また様々な立場の方が協力して防災や減災に力を尽くしていることを認識し、自分事として問題を捉えることができたと考える。そして「六条の奇跡プロジェクト」として自分なりの行動ができたことで、防災に興味を持つ態度を養えたと考える。今後は子どもたちに、防災だけでなく、現代社会を取り巻く様々な課題に対して主体的に関わる力を養っていきたい。

私たちの未来のために…
―Ｍｙ　ＳＤＧｓをつくろう―

鬼塚　正博（福岡市立玄界小学校）

１．目　標

ＳＤＧｓについて知り，自分の学校や学級，自分自身の課題解決に向けたＳＤＧｓの目標やターゲットを設定し実践していくとともに，それらの活動を通して，ＳＤＧｓについての知識を深め，高学年としての自覚をもたせたり意識を高めたりする。ＳＤＧｓを意識したこれからの自己の生き方を考える子どもを育成する。

２．単元について

2015年９月に国連サミットで採択されたＳＤＧｓは，様々な広告やＣＭなどで目にすることが多くなってきた。また、福岡市役所でも、ＳＤＧｓの目標を掲げていることから，ＳＤＧｓについて学ぶいい機会だと考えた。

本単元では，自分の学校や学級を見つめなおし，よりよい学校生活を送るために，それぞれの課題解決に向けたＳＤＧｓの目標やターゲットを設定していった。ＳＤＧｓを学校や学級の目標に設定し，ターゲットを自分たちの言葉に置き換えて決定させることで，高学年として，自分たちの力でより良い学校，学級にするという意欲や意識を高めていった。

最後は，自分自身に立ち返り，よりよい６年生になるための「Ｍｙ　ＳＤＧｓ」を設定した。ターゲットを自分自身の言葉で考えさせ，継続的に活動し，達成する努力を続けることができるようにした。

３．ＥＳＤとの関連

【ＥＳＤの視点】　多様性，連携性，
【資質・能力】　クリティカルシンキング，コミュニケーション力，
【価値観】　世代内の公正と世代間の公正，互いの人権・文化を尊重，
【ＳＤＧｓ】　４　質の高い教育をみんなに
５　ジェンダー平等を実現しよう
１７　パートナーシップで目標を達成しよう

図１　My SDGs

４．成果と課題

最初に，GT を招聘して，SDGs について教えてもらったり自分たちで調べながら詳しく学習していったりしたことで，SDGs にとても興味をもち，意欲的にその後の学習にも取り組む子どもの姿が多く見られた。

変容を促すESDの価値観の「世代内の公正と世代間の公正」において，学校のSDGsを作成したものの，周知がうまくいかず他学年への広がりが不十分だった。

第３分科会③

奈良町資料館で学ぶＳＤＧｓ
―ならまち世界遺産学習―

南　哲朗（奈良町資料館　館長）

Ⅰ　ならまちに有る私設の資料館

古都奈良の文化財として世界文化遺産に登録されている元興寺。その周辺は「ならまち」と呼ばれ、江戸時代末期から続く古い街に私設「奈良町資料館」（略：資料館）がある。１９８５年に開館し、昔の絵看板や民具、仏像などの展示があり、館長自ら昔人体験を実践し「まちの博物館」を展開している。

Ⅱ　資料館での世界遺産学習とキャリア教育取組の趣旨

奈良市教育振興基本計画、学校教育の充実の項に、「１）世界遺産学習を通して、地域への愛着を育み、アイデンティティの確立を目指しまた、持続可能な社会の担い手として、地域やグローバルな社会で活躍する人材を育成。２）キャリア教育を通じて主体的に自己の進路を選択し決定できる能力を高め、社会的・職業的に自立できる力を育成」と定義されている。それらを踏まえて地域や行政と連携し体験学習や展示会などを企画実践している。

一例として、資料館へ地域の学生を受け入れ、観光、教育の分野で地域コミュニティを図り、職場体験や展示会を通して、キャリア教育を行う。これらを称してならまち世界遺産学習「奈良町資料館で学ぶSDGｓ」である。

（１）世界遺産学習として、職場体験でのプロセス及び結果と今後

資料館で職場体験する中学生の役割は、来館者へ奈良観光の課題等をヒアリング~アンケート~集計~分析~考察し発表資料を作成する。そして最終日に資料館で、地域住民や体験校の校長を招いて終了発表会を行う。中には自らが「開発と保存」と言う課題を見出し発表する生徒もいた。体験の後日に生徒が親や友人と来館してくれる様子も微笑ましい成果と思う。資料館では、加藤学長が言われる「魂のこもった授業」を実践する事をいつも意識している。

今後も、コロナ禍に対応可能なＳＮＳを活用したオンライン研修や現場体験のバランスを加味した職場体験の充実を図っていく。

（２）キャリア教育として、地域の幼稚園、小、中学校～大学との取組み

園児、生徒による展示会を定期的に開催。そのような取り組みをする事により子供たちが世界遺産や、伝統文化など通して、それらを敬い尊重する態度や地域を誇りに思う心情を養う事が出来る。また、大学生においても、奈良町フィールドワークやならまち講話､「ならまちで学ぶSDGｓ」を体験する事により、環境、国際協力、技術革新、人権、能動的な参加など多様な学習へと展開され、持続可能な社会の担い手を育てる教育のESDにもつながることになる。

Ⅲ　まとめ

資料館は今後も、持続可能な素材の宝庫のならまちにおいて「問の質を高める」「学び合う場つくり」「子どもに合った体験」と言う観点に留意した内容の体験学習をメインに地域密着型のまちの博物館を継続邁進する。

慈恩寺の魅力を発信して、醍醐地区を盛り上げよう！
―目指せ！慈恩寺子どもガイド―

小関　直幸（山形県寒河江市立醍醐小学校）

Ⅰ　本校の総合的な学習の時間「醍醐学」について

本校は慈恩寺を中心にした歴史や文化、自然が豊かな地域にある。それらを活用し、昭和４５年から「自然学習」と称して、本校独自の総合的な学習に取り組んできた。現在は「醍醐学」～地域の良さを発見しよう！～という名に称を変えて、各学年で下記のテーマを中心とし、地域の素材を生かした探究的な学習に取り組んでいる。地域に積極的に参画し、地域の魅力を発信できる子どもを育てることをねらいとしている。

・３年生…慈恩寺蓮の再生　　・４年生…慈恩寺境内のホタルの愛護活動
・５年生…醍醐の米作り体験　　・６年生…慈恩寺の歴史や文化の発信

Ⅱ　慈恩寺について

慈恩寺は、７４６年に聖武天皇の勅命により、インド僧婆羅門によって開山された、１３００年の歴史をもつ寺院である。また、国、県、市が定める数多くの文化財を保有していることや、広大な慈恩寺旧境内にすぐれた自然資源を有していることから、平成２６年度に国史跡に指定された。この指定を受け、寒河江市では、寒河江市慈恩寺「悠久の魅力」向上基本計画を策定し、国、県及び関係団体等の協力を得て、新たな観光拠点の柱として各種整備を実施している。

Ⅲ　「慈恩寺子どもガイド」の実践

時代の流れや環境の変化などに伴い、慈恩寺の重要な資源が損なわれつつあること、醍醐地区の人口減少や高齢化などにより地域の活力が低下しつつある現状から、慈恩寺の魅力を主体的に発信する児童を育てたいという思いをもち、今年度初めて本校の児童が慈恩寺をガイドする「慈恩寺子どもガイド」を実施した。ＥＳＤの視点（見方・考え方）を相互性・連携性・責任性、ＥＳＤの資質・能力をクリティカルシンキング・コミュニケーションを行う力・進んで参加する態度、ＥＳＤの価値観を世代間の公正とし、ＳＤＧｓの目標１１「住み続けられるまちづくりを」の達成を期待した単元を計画した。慈恩寺の歴史などの「こと」や慈恩寺にある文化財などの「もの」だけでなく、慈恩寺が１３００年もの長い間失われずに残ってきた背景にある「ひと」の思いに触れることができるよう、慈恩寺寺務所の方やボランティアガイドの方、コミュニティースクールの地域コーディネーターの方など、多くの「ひと」から学習活動に携わっていただき、子どもたちの地域づくりに主体的に参加しようという気持ちを醸成することができた。

「慈恩寺子どもガイド」が持続可能なものになるよう本校で受け継いでいくことで、慈恩寺を活用した持続的な地域活性化の一端を担っていくことができると考える。

【ESD講演会】12 月 25 日(土)15:45－17:00

「ESDカリキュラムマネジメントはこうする」
講師:東京大学　及川　幸彦　氏

【ESD 実践者対談シンポジウム】12 月 26 日(日)9:00―10:30:多目的ホール
◇シンポジスト
・長野会場:菅原　勇介氏(山ノ内町立南小学校)
・沖縄会場:神村　智子氏(沖縄県教育委員会)
・山形会場:太田　馨氏(上山市立南小学校)
・大牟田会場:高倉　洋美氏(大牟田市教育委員会)
・福岡会場:遠入　哲司氏(福岡市立田隈小学校)
・奈良会場:西口　美佐子氏(奈良市立東登美ヶ丘小学校)
◇司会者:大西　浩明　氏(奈良教育大学　特任准教授)

長野県の小さな小学校が多様な主体と共に進めるESD/SDGｓ

～志賀高原の水を守りたい（６年総合）～

菅原　勇介（長野県山ノ内町立南小学校）

Ⅰ　はじめに

昨年度米の食味コンクールで金賞を受賞した経験をもとに「きれいな水」とは何かを疑問に感じた６学年の子どもたちは，身近な場所での水質調査を行ったり，水不足の解決に向けて取り組む大学の研究施設を訪れたり，修学旅行で海の漂着ゴミ見たり，SDGs未来都市大町市など，多様な主体と関わることを通して，学習を深めた。この実践は，子どもたちが，学んだことや水環境を未来につなげるために自らは何ができるか考え，それを自校や他校の小学生に向けて発表をしたり,地域の人にも伝えようとしたりし行動化を図った取組である。

Ⅱ　取組の概要（発表内容の概要）

①子どもたちは，氷見市の海岸から持ち帰ってきたゴミがどこから来たのか，どんなゴミなのか調べ世界中のゴミが海を漂い漂着しているという事実を目の当たりにした。そして，そのことを，全校に伝えたいと考え全校での集会を実施した。視聴した１～５年生からは感想が出され，３年生からは「ゴミ拾い登校をしているが，やってもやってもゴミが減らない」という話があった。子どもたちは，その意見をもとに,「ゴミのポイ捨てについてポスターなどもあるけれども効果がないのではないか」とさらに追究を始めた。

②信州大学の先生の協力を得て，志賀高原の源流周辺の水質や環境を調べに行った。そこで，源流周辺の水がいかにきれいかを再確認した子どもたちは，「町が水環境保全のために何をしているのかを聞きたい」「他の源流周辺の学校ではどんなことをしているのか」など少しずつ，視野を広げて学習を深めようとする姿が見られるようになった。

③町の「総合計画」を読み，ユネスコエコパークに関する部分に「自然の保全」はあるが,「水」に関する記述がないことを知った子どもたちは,「本当に町はきれいな水を守ろうとしているのか。未来にもつなげられるのか」と一層の不安を感じた。そこで，奈良県の川上村を紹介し,「森と水の源流館」との交流を実施した。他地域との交流によって地元のよさを見つめその価値を実感するということを学んだ。また,「天竜川総合学習館」との学習も実施中流域の方が上流部に期待することを知った。その中で,「ゴミを拾うとかよりも，川遊びや体験活動を実施し，川がいかに素敵な場所かを味わってもらうことで，人々の意識を変える」という話がもっとも印象的だったようだ。それらの学びをもとに11月に町内の６年生，議員，教育委員会と発表会を行い，子どもたちの問題意識を町と共有することにつながっていった。

Ⅲ　今後に向けて

成果　・当事者意識と客観的な見方　「やってほしい」→「みんなとやらなくちゃ」

　　・文化・自然環境・社会的資本のつながりの実感　カリキュラムマネジメント

課題　・中学校の連携　より目指す資質能力を明確にしていく　統合を見越した学習

　　・コミュニティースクール運営委員会との連携→地域住民も意義を感じる ESD

人とつながり、つくる小学校3年生総合的な学習の時間
―みあとに残す「たからもの」を伝えよう―

長浜　佐知子（奈良市立都跡小学校）

Ⅰ　はじめに

本学校は、世界遺産に登録された「古都奈良の文化財」のうち，平城宮跡・唐招提寺・薬師寺の3つが校区内にある地域に立地している。また、ユネスコスクールとして、SDGsの視点をもとに，学びと社会をつなぐことを大切に，児童に育成したい資質・能力を明確にした世界遺産学習を研究してきた。

本実践は､「自分の生活が文化の継承とつながっていることを考えられる子ども」の育成をめざして、文化を守ってきた人からのお話や、伽藍作り、現地での体験を通して、より深く地域の文化・人がつながっていることを知り、自分もその継承に深くつながっていることに気付き、行動できるのではないかと考え、実践を展開している。

Ⅱ　授業実践

【他教科との関連】
道徳「マリーゴールド」図工「薬師三尊像」
国語「短歌を楽しもう」「わたしたちの学校じまん」「つたわる言葉で表そう」
社会科「火事からくらしを守る」
【ESDの視点】相互性、有限性、連携性、責任性
【関連のある SDGs のゴール】
⑪住み続けられるまちづくり、⑫つくる責任、つかう責任
【大切にしていること】①児童の実態に合わせ、体験的に探究活動を進める。
②地域の人とのつながり③ICT 活用能力の育成、多様な表現方法の獲得

わたしたちのまち　みのしま商店街
―住吉っこにできることは何か―

大島　英樹（福岡市立住吉小学校）

Ⅰ　はじめに

本実践では，地域に愛されているみのしま商店街を取り上げる中で，まちの今後のことを考え，行動化を促すことを目的にしている。博多の台所として賑わっていたみのしま商店街の数も，少子高齢化だけでなくコロナ禍の影響を大きく受け，年々減少している。みのしま商店街の元理事長は「お客が少なくなってきてこのまま商店街が継続できるのか不安」と話していた。子どもたちに，わたしたちのまちの課題を直面させ，商店街のために何かできることはないかを考え，それを形にして行動に移すことは，ESDの視点からも大変有意義なことであると考えている。

Ⅱ　実践の概要

■第６学年　総合的な学習の時間（全１０時間）

１　みのしま商店街の歴史や現状について学習をする。（見つめる）
　（１）商店街に関する事前アンケートを取り，子どもの意識調査を行う。
　（２）みのしま書店街の理事長をGTとしてお招きし，商店街の歴史や現状の講話をしていただく。

２　みのしま商店街について調べる。（調べる）
　（１）見る視点（人の流れ，店員やお客さんの年齢層，いいところ）の確認をする。
　（２）放課後等の時間に，商店街に見学に行き，現状を把握する。

３　みのしま商店街のためにできることを考え，まとめていく。（広げる）
　（１）各クラスでできることを考える。
　（２）各クラスの考えを持ち寄り，学年で考えをまとめる。

４　作業を行う。（深める）
　（１）グループに分かれて作業を行い，贈呈物を作成する。
　（２）贈呈式を行う。
　（３）事後アンケートを取り，子どもの意識調査を行う。

Ⅲ　考察

○　商店街のためにできることを真剣に話し合い，贈呈物を作る子どもたちの姿から，「自分事」として学習に取り組む姿が見られた。

○　学校と商店街との交流がなされ，子どもたちが商店街にさらに親しみをもつようになってきた。

●　総合的な学習の時間の目標達成のために，他教科との関連性をカリキュラムマネジメントしていくことで，より深まっていく学習になったのではないか。

鹿苑で暮らす鹿にドングリを届けよう

鎌田　大雅（奈良教育大学附属幼稚園）

Ⅰ　活動のきっかけ

本園の子どもたちにとって「奈良の鹿」はとても身近な存在です。登園してくる道中で見かけることもありますし、園内から大学構内にいる鹿を見ることもあります。今回の実践は、普段見ている当たり前のようにいる鹿とは少し違った鹿が奈良公園にいることを子どもたちに伝えるところから始まります。

様々なトラブルを抱えた鹿（病気や怪我等）が保護されている鹿苑（ろくえん）について話を聞き、奈良公園にいる鹿に比べるとご飯がとても限られていることを知ると、「僕たちでドングリを拾おうよ！」「拾ったドングリを鹿苑に持っていこうよ」となり、まずは幼稚園のドングリを拾い、さらに地域にある神社に拾いに行きました。

Ⅱ　活動の流れ

（１）鹿苑の鹿について担任からの話を聞く。
（２）幼稚園にあるドングリを拾い集める。
（３）地域にある神社にドングリを拾いに行く。
（４）NHKのダーウィンが来た！
　　「世界でも奈良だけ！野生のシカ　古都奈良に生きる」を視聴する。
（５）年長５歳児と一緒に鹿苑にドングリを届けに行く。

写真１：幼稚園の「こどものもり」でドングリを拾っている場面

写真２：神社で拾ってきたドングリを広げて見ている場面

写真３：「ダーウィンが来た！」を視聴している場面

写真４：鹿苑に行って、ドングリを鹿にあげている場面

第５分科会①

地域とのつながりを深め、自分なりに考え行動する子供を目指して
―野間川環境調査隊（海洋教育）―

中島　寛子（大牟田市立天の原小学校）

Ⅰ　はじめに

本校では、各学年の発達段階に応じて海との共生について学ぶ「海洋教育」を進めている。３年生では、有明海干潟観察や有明海で採れる魚の調査を通して、干潟の楽しさを感じたり、様々な生き物が海で生活していることに気付いたりしている。また、調べたことをもとに有明海の生き物図鑑を作成したり、干潟の生き物の特徴を生かしたゲームを考えたりした。４年生では海につながる鳴川の様子を観察し、鳴川のごみについてポスターなどを通して校内に発信してきた。

そこで、第５学年の本単元では、本校区を流れる野間川を対象として、子供たちが野間川のよさに気づき、川の環境が私たちの生活と相互に関連していることを理解し、自分たちが思い描く未来の校区の実現に向けてやるべき使命を自覚することができるように、子供の意識が連続・発展する探究的な学びを展開する。

Ⅱ　授業実践

（１）単元の目標

○　海と人の共生のために必要となるひと・もの・ことやそのつながりについて多様性、有限性、相互性などの視点から理解することができる。

○　有明海や野間川での調査などを通して、海、川、人とのつながりについて多面的・総合的に考えるとともに、持続可能な地域・社会の未来像を予測し、考えたことを他者によりよく伝わるように表現することができる。

○　海、川、人や社会との相互のつながりに関心を持ち、つながりを尊重するとともに、海、川、人との共生のために、主体的にかかわり、他者と協力しながら、自然や社会を構成する一員として行動しようとする。

（２）主な学習活動と支援

①「野間川」についての探究の問いをもつ。
　・体験活動（ＧＴとの出会い）

②野間川がどのような川か調査をし、野間川のよさを実感する。
　・ＫＪ法を用いた野間川のよさの交流

③野間川の汚れの現状を知り、「野間川の汚れ」に対する新たな問いをもつ。
　・資料の比較（新たな資料の提示）

④野間川の汚れの現状・原因・影響を調査する。
　・透視度計を使った水質調査（ＧＴとの調査活動）

⑤調査結果と私たちが描く「未来の天の原」とを比較し、自分たちにできることを考え、実行する。

Ⅲ　成果と課題

【成果】

・ＧＴとの出会わせ方やその活用、そして資料の比較という工夫をしたことで、子供たちが自ら解決したいと思う問いをもち、意欲的に探究していくことができた。

【課題】

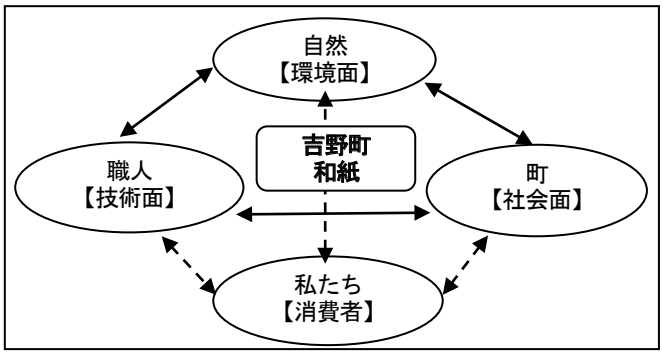
・子供たちの主体的な課題解決を通して、思考・判断・表現し、価値観の変革を図る学習活動をさらに工夫すること。

吉野町の和紙から芽生える消費者意識
―小学校4年生社会科「県内の伝統的な地場産業」の実践より―

中澤　哲也（平群町立平群北小学校）

Ⅰ　目的

奈良県内にはたくさんの伝統工業があり、それらは主に環境面、技術面、社会面の三つの要因によって守り受け継がれてきた。本実践では、奈良県内の特色ある地域の中から、吉野町の和紙作り産業を取り上げる。これまで伝統を守り受け継がれてきた要因を考えることを通して、今後も吉野町の和紙を持続可能な伝統工業として発展し続けていくためにはどうすればいいか、消費者意識の視点も踏まえながら自ら考える児童の育成を目指す。



【図１　本実践の構想図】

【図２　和紙と洋紙を比較する児童】

Ⅱ　方法

主な学習活動
①奈良県にはいろいろな伝統工業があることを理解する。
②吉野町で和紙産業が発展している事象をとらえ、学習問題を設定する。
③吉野町の地形や自然の様子を調べる。【環境面】
④楮を使い、手漉きで和紙作りを体験する。
⑤和紙作り職人について調べる。【技術面】
⑥吉野町のまちおこしについて調べる。【社会面】
⑦３つの要因について整理し、まとめる。
⑧吉野の和紙産業が持続可能な産業になるために必要なことを話し合う。
⑨県内の他の伝統工業について調べ、リーフレットにまとめる。

Ⅲ　成果

実践後の児童の振り返りを以下に記す。

吉野町の和紙を守り続けるために必要なのは、世界中の人々だ。なぜなら最初は奈良の人が買って他県の友達に素晴らしさが伝わり、広がって外国など(地球全体)にも素晴らしさが伝わるかもしれないから。私はこの授業を通して自分たちも跡継ぎや職人にならなくても、和紙を買い、友達などに渡すだけでつながり、吉野町・自然・職人の全ての役に立つことができることがわかった。

第５分科会③

ESDの理念を含んだ道徳科授業の実践

若森　達哉（奈良教育大学附属中学校）

Ⅰ　はじめに

本校研究推進部では校内において、道徳の教科化、評価化にあたり特別の教科道徳においてESDと関わりをどのように位置づけていくかということで議論を進めてきた。ここから内容項目の深化だけでなく、これからの社会の担い手（市民）として、社会問題に目を向け（または見取り）、どのような社会を実現すべきかということを考えさせることを目的とし、学習者、関わる教員もまた社会形成を担う一個人であることを前提とした思考および対話の場として道徳を本校のESDの中に位置付けようとしてきている。

そこから道徳の授業においても「養いたいESD の視点、資質、能力」を意識して授業を組み立てるという方法で実践を重ねている。

Ⅱ　教科書をもとにした実践

（１）1学年「平等と公平」(2021)

平等と公平の違いに触れ混同による社会問題に目を向けた上で、身近なジェンダー問題への着目を行った実践

（２）2学年「感動の対象」(2020)

「思いやり」や「感動」といった言葉の裏に存在する無意識下での上下関係やゆがんだ構造について考えた実践

（３）3学年「島の開発」(2020)

行事「臨海実習」との関連から島の開発と環境問題を自分事化して話し合うことを通して多声性に気付かせる取り組み

（４）3学年「ナショナルアイデンティティ」(2021)

文化の性質に触れつつ、昔から継がれた日本（日本文化）の魅力とは何か、また私たちは何をこれからの社会につなげていくべきかを考える取り組み。

Ⅲ　近年の身近な社会問題を意識して自主教材で取り組んだ実践

（１）2学年「コロナ禍と社会問題」(2020)

コロナ禍で現れた「自粛警察」の問題。なぜ人は正しさを人に強要するのか。新聞やニュースを見ながらタイムリーな社会問題に対し話し合った取り組み。

（１）2学年「卒業生からのメッセージ」(2020)

コロナ禍によって多くの行事が失われたことを卒業生が心配して取り組まれた活動。メッセージを読みながら「どうして卒業生は後輩を心配したか」について考えることで「ケア」の構造に気付かせようとした取り組み。

Ⅳ　ESDの理念を含んだ道徳に必要なポイント

2020年本校道徳研修会講師孫（文教大学）先生より

①道徳の枠組みそのものを問う　　②ケアする、される

③ポリフォニー（多声性）に耳をすます　④身体性、感化

2021年本校道徳研修会講師小嶋（金沢学院大学）先生より

「多様な価値の中から、他者と共に考え、
　　対話しながら、自ら価値を選び取る能力を育てる道徳」

ESDの視点を加えた買い物・調理学習の実践

阿部　友幸（山形大学附属特別支援学校）

Ⅰ　はじめに

本校は知的障がいのある児童生徒が学ぶ学校であり、本実践は高等部３年生の生徒７名を対象としている。自分でタブレット型端末等を活用して調べることができる生徒から、教師と一緒に写真やイラスト等を使ってやりとりする生徒まで、実態の幅が広い。

本実践は、附属学校園の栄養教諭や、地産地消の取組みを進めている飲食店の方との出会いから、自分たちの生活や消費行動が環境につながっていることの実感と、価値観や行動の変革を促す学習である。

Ⅱ　実践概要

実践期間：令和３年１０月６日～１２月１５日

次	主な学習活動
第１次	○自分でできる簡単調理をしてみよう。（９時間） ・主食、主菜、副菜、汁物の分類ごとに簡単調理したいものを決める。 ・スーパーに買い物に行き、電子レンジ等を使って簡単調理する。
第２次	○食べ物やゴミの問題について考えよう。（６時間） ・栄養教諭から食育指導を受け、地球規模の食品ロスやゴミの問題について知る。また、リサイクルや地産地消などの取組みについて知り、地産地消を進める飲食店として県庁食堂について紹介を受ける。 ・給食の残飯（白米）の重さを毎日計って記録する。 ○地産地消の良さについて考えよう。（９時間） ・校外学習で県庁食堂に行き、地産地消の弁当と芋煮を食べる。また、社長から話を聞いたり、質問したりする。
第３次	○山形名物の芋煮をつくろう。（１２時間） ・スーパーに行き、産地等の情報に気を付けながら食材を購入する。店頭で牛乳パックや食品トレイを出してリサイクルする。スーパーが地球環境のために行っている取組みについても知る。 ・芋煮を調理する。主菜や副菜は電子レンジで簡単調理をする。 ○学んだことをみんなに伝えよう。（６時間） ・自分たちが学んだことをまとめ、栄養教諭に活動を評価してもらう。 ・給食の残飯の量を報告し、白米を少なくしてもらえるか相談する。 ・栄養教諭から「給食献立表」の一部に学習の成果を掲載することについて提案を受け、原稿を作成して提出する。

Ⅲ　ＥＳＤとの関連

【見方・考え方】相互性、責任性

【資質・能力】　クリティカルシンキング、長期的思考力

【価値観】　世代間の公正、自然環境や生態系保全を重視する

【ＳＤＧｓ】　１２（つくる責任　つかう責任）

第６分科会①

ESDの視点に立った新型コロナウイルス感染症の教材化
―小学校社会科第6学年「国や地方公共団体の政治」を例に―

島　俊彦（大牟田市立吉野小学校）

Ⅰ　はじめに

本実践は、小学校社会科の政治学習において第６学年の児童が、新型コロナウイルス感染拡大防止や経済支援に向けた国や地方国協団体の政策等を教材に、政治の働きや国民生活との関わりを考える学習である。

Ⅱ　授業実践

本年度担任する第６学年の児童33名を対象に、本年５月に「わたしたちの暮らしを支える政治」と題した実践を展開した。

【単元の目標】

・新型コロナウイルス感染拡大防止や経済支援に向けた国や地方公共団体の政策を資料から読み取り、国民生活との関係を図にまとめ、政治は国民生活の安定と向上を図る働きをしていることを理解することができる。(知識･技能)

・政策と国民生活を関連づけながら図に表したり、政策の是非を選択・判断したりして、コロナ禍の政治の働きと自分たちの生活とのつながりを考えることができる。（思考・判断・表現）

・我が国の政治の働きに関心をもち、政治の働きを意欲的に調べ、政治の働きと国民生活のつながりから、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かすことができる。（主体的に学習に取り組む態度）

主な学習活動	学習への支援・資料
１．新型コロナウイルスによる影響について話し合い学習問題をつくる。 ２．感染拡大防止や経済支援に向けた国や地方国協団体の政策を調べる。 ３．学習問題についてまとめる。 ４．コロナ禍で「経済」「人命・健康」を両立する方法について考える。	・誰にどのような影響があるか，人々の生活を具体的に考察させる ・国，福岡県，大牟田市の取り組みについて調べさせる。 ・国民生活との関わりを考察させる。 ・ESDの視点を踏まえた選択・判断や構想場面を設定する。

Ⅲ　成果と課題

本実践における成果と課題は、それぞれ２点ある。

【成果】

・現実社会で起こる問題の教材化により社会参加に向けた意欲が高まった。

・価値の対立から調和を志向するESDの学習過程となった。

【課題】

・具体的な人の営みを捉えづらく、抽象度の高い学習となった。

・「経済」の視点が子供にとって捉えづらいものであった。

尚、具体的な実践の様子や児童の変容、成果と課題については、大会当日に詳細を報告する。

平和学習
―大切にしよう！自分にとっての平和とそれぞれの平和を―

中村　友弥（奈良市立朱雀小学校）

Ⅰ　はじめに

核兵器廃絶運動の中心的存在だった坪井直さんが、今年亡くなられた。本実践では、被爆体験者の方にお話を伺うことができたが、「あと何年、語り部ができるだろうか。」と危惧されていた。戦争や原爆を体験した語り部さんの話を聞くことができなくなったら、体験者が見た色、聞いた音、嗅いだ臭い、激痛や突き刺すような暑さをどれほど想像させられるだろうか。また、今年はコロナ禍で平和記念公園での学習ができなかった。どのような学びが、子どもたちの心に平和の火を灯せるのか。悩み苦心している。本実践の発表を切り口に、平和学習のこれからを模索したい。

Ⅱ　授業実践

【単元の目標】

・戦争や原爆について調べたり語り部さんの話を聞いたりして、戦時中の人々の生活や様子を知り現在まで戦争の影響が続いていることを理解できる。
・様々な人の平和への考えを共有し、自分にとっての平和を表現する。
・意欲的に学習に取り組むとともに、課題解決や協同的な活動を通して、想像力豊かな社会参加の態度を育むことができる。

主な学習活動	学習への支援・資料など
1　平和学習の問いをつくる。	・平和記念式典についての新聞記事
2　語り部さんの話を聞き、当時の様子を知る。	・被爆体験者の秋山さんの話 著書「ぼくの戦争～原爆は、そら豆がこげるにおい～」
3　平和についてのそれぞれの意見を共有する。	・空襲を体験された大木さんの話 ・６年生、保護者、４・５年生からも平和への考えを聞く。
4　平和集会 ～大切にしよう！自分にとっての平和とそれぞれの平和～	・学びの振り返り ・成果物の作成

Ⅲ　成果と課題

【成果】

・今の生活や友だちとの関係を見つめ直す児童が見受けられた。
・平和形成への諸課題について、気づくことができた。

【課題】

・被害者への共感や平和形成に参画する態度を育むことができたのか。
　自分ゴトとして考えられたか。その評価について。

「地域と歩む」持続可能な開発のための教育
― ESD・SDGsを視点に取り入れた教育活動を通して ―

新垣　孝子（糸満市立糸満中学校）

Ⅰ　はじめに

本校は､令和元年度から令和２年度沖縄県教育委員会ESD研究指定校を受け、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の視点を取り入れ、授業改善に努めてきた。特に４年前から取り組んでいる「海洋教育」（教育課程特例校として指定を受けている）において、地域の課題を自分事として具体的な解決策を考え実践に結び付けるよう各学年特色ある学習活動を行っている。今年度は、ＮＩＥ実践校として,ＥＳＤ研究の内容を継続して、生徒の言語能力を向上させ、思考力・判断力・表現力を高め、教科と総合的な学習の時間をつなげられるよう授業実践を行っている。

Ⅱ　具体的な取り組み

（１）これまでの地域における糸満中学校の取り組み

（２）学校行事等や総合的な学習の時間における取り組み（実践内容）

①　総合的な学習の時間

・マイクロプラスチック採取をしよう。(1年)
・東京海洋大学海事普及会による「海と船の教室」。(1年)
・海の環境について考えよう講演会（１年）
・ビーチクリーンを通して海洋ごみについて考える。(2年)
・糸満の海について調べよう。(2年)
・ジョン万次郎に学ぶ講演会。(2年)
・防災・減災をテーマにテント設営や簡易飲み水つくりなどを体験。(3年)
・防災時の食事作り、火起こし・人命救助（3年）

②　教科の実践

・糸満大綱引きの歴史について学ぼう。(道徳)
・生徒会、平和大使による「平和学習」特設授業（道徳）
・連立方程式「ＣＯ２削減を考える」(数学)
・一次関数「海洋ごみを関数で考えてみよう」(数学)
・地域の防災を考える（社会）
・地域の特産品や観光ＰＲをしよう。(国語・英語)

Ⅲ　今後の取り組み

Ⅳ　その他

コロナ禍における奈良教育大学ユネスコクラブのESD実践
―第４回集まれ！ESD子ども広場での実施を通して―

佐藤　こころ　根本　優（奈良教育大学ユネスコクラブ）

Ⅰ　奈良教育大学ユネスコクラブと集まれ！ESD子ども広場

本団体 は2011年７月に活動を開始した学生団体で、ESDを実践できる教員になることを目的に、ESD―SDGsに関する勉強会、他大学学生や地域活動団体等との多様な連携事業、ユネスコスクールを中心とした学習支援や子ども向けイベント等の企画運営に取り組んできた。

「集まれ！ESD子ども広場」とは、平成30年度から近畿ESDコンソーシアムの事業として行っている、１日を通してESDを体験的に学ぶ行事である。これは、2012年度より実施した「ESD子どもキャンプ」の後継であり、2018年から実施している。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、令和２年度は開催を見送った。

今年度は開催形式を工夫することによって実施した。本発表ではその成果を示したい。

Ⅱ　コロナ禍における「集まれ！ESD子ども広場」の始まり

例年は、奈良教育大学に奈良市内の小学生を集め、大学周辺でのフィールドワークやワークショップを通して、ESDを体験的に学ぶ活動を行っていた。

昨年度は中止としたが、今年度はコロナ禍でも開催すべく、企画チームを立ち上げた。検討を重ねた結果、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため，大学生が小学校に赴き、出前授業形式で実施することとし、奈良市立伏見小学校にご協力いただいた。

Ⅲ　新しい様式での「集まれ！ESD子ども広場」

今年度は、小学校の授業を２時間頂き、その時間で実施した。目標は二つある。一つ目は児童に見えるものの違いや人の見方・考え方といった視点の違いを感じさせることだ。二つ目は、自分の見方や考え方が唯一ではないということを感じさせることだ。

トリックアートや風刺画を見ることを通して、多面的・総合的に考える力をつけるような内容とした。

Ⅳ　まとめ

今回、コロナ禍にも関わらずご協力いただいた伏見小学校には、本当に感謝申し上げたい。児童にとって、本事業は多面的・総合的に物事を考えられるきっかけになったと考えている。しかし、学生の学びについては未知数だ。本事業は子どもたちの学びはもちろんのこと、教員を目指す学生の学びも非常に重要である。毎年作成している報告書をもとに、学生の学びを検証して、次年度の方法を模索したい。

2021年度　近畿ESDコンソーシアム　奈良教育大学
成果発表会･実践交流会

２０２１年１２月２５日発行

近畿ＥＳＤコンソーシアム運営委員会　奈良教育大学
〒６３０－８５２８　奈良市高畑町